

加藤清正の実像

清正の名を天下に知らしめた天正11年(1583)の賤ヶ岳の戦い。この合戦を境に、ようやく確かな史料の中に清正の姿がうっすらと浮かび上がってきます。では、その後の清正について史料をもとに見ていきましょう。

〈6〉清正の出世

賤ヶ岳の戦いで清正と言えば、いわゆる「七本槍」の1人として有名ですが、当時の史料には、その姿についてどのように書かれているのでしょうか。秀吉の側に仕えていた大村由己が合戦直後に著した「柴田退治記」という比較的信頼のおける史料の中に、先頭を切って敵陣を突破した「近習之輩」の1人として清正の名が見えます。この「近習之輩」には、清正のほかには、福島正則、脇坂安治、加藤嘉明、平野長泰、片桐且元、糟屋武則、桜井左吉、石河一光の計9人の名前が挙げられています。「七本槍」とよく言われますが、実際には9人いたことがわかります。残念ながら、清正が誰をどのように討ち取ったのかという具体的なことまでは書かれていませんが、実際に戦場で秀吉を喜ばせる活躍をしたことは確かなようです。史料には、「秀吉所切崩之一番鑿」(槍を振るって敵陣を切り崩す働きをした)と記されています。

さて、戦で戦功を挙げた者に対しては主君から褒美が与えられます。この戦いで抜群の働きを見せた清正は秀吉からどのような褒美が与えられたのでしょうか。「柴田退治記」には、清正を含む活躍した9人に対して秀吉が、特別に席を設けて盃を下し、黄金の羅帛(絹織物)と領地を与えたと記されています。さらに、戦功を称えるための感状も秀吉から9人それぞれに対して出されています。この時に出された感状は、現在、福島正則宛をはじめ原物が5通、片桐且元宛などの写しが3通、いずれもほぼ同じ文面で計8通が現存しています。清正宛のものだけ原物も写しも確認されていませんが、状況から考えて清正にも出されたことは間違いのないでしょう。この時に出された秀吉の感状と言われるものが「清正記」に収録されていますが、他の8通の感状と比べると文面がまったく異なるため、後

世創作された偽文書だと思われる。

清正以外の8人に出された感状には、褒美として領地を与える内容が書かれていますが、もちろん清正にも領地が与えられています。それは、合戦直後の天正11年8月1日に秀吉が出した知行宛行状※によって確認できます。それには近江国(現在の滋賀県)、山城国(現在の京都府)、河内国(現在の大阪府)のうちから3000石の領地を与えると書かれています。具体的な領地の場所は、別紙に添えられた知行目録によって判明します。現在の地名で言えば滋賀県栗東市出庭(1800石)、京都府京田辺市三山木(50石)、大阪府大東市中垣内(302石)、大阪府四條畷市岡山・砂(795石)の4か所です。賤ヶ岳の戦い前の清正の知行高は、わずか120石でしたので、実に25倍の加増を受けたこととなります。

この時の褒美をめぐる、有名な逸話が残されています。実際福島正則は清正より2000石多い5000石の領地を与えられましたが、それを聞いた清正は、福島より少ないことに腹を立て、秀吉に直訴した結果、5000石に増やしてもらったと小説などでしばしば書かれています。しかし、史料上では5000石の領地を与えられた形跡はなく、この話は後世に創作されたものだと思われる。

しかし、いずれにせよ清正は、賤ヶ岳の戦いで功績により秀吉から破格の処遇を得たことは事実であり、自身の生涯でも忘れられない飛躍の年になりました。この時、清正22歳。肥後に入国する5年前の出来事でした。

※「知行宛行状」…領地を与える時に主君が家臣に対して出す文書

